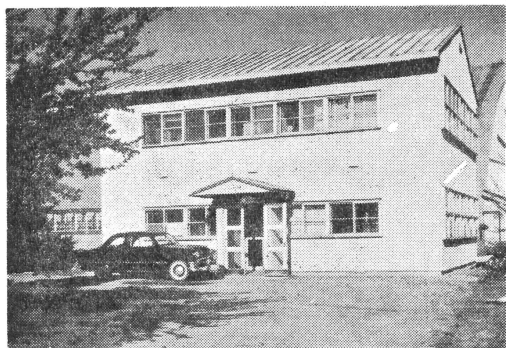


地方だより



三沢航空測候所（航空保安事務所との合同庁舎）

東北本線で青森県太平洋沿岸の小川原沼の近くを通る際に車窓にジェット機の爆音を耳にし、また高く低く飛び交う飛行機の姿を見かけたら、そこが米空軍基地として知られる三沢である。

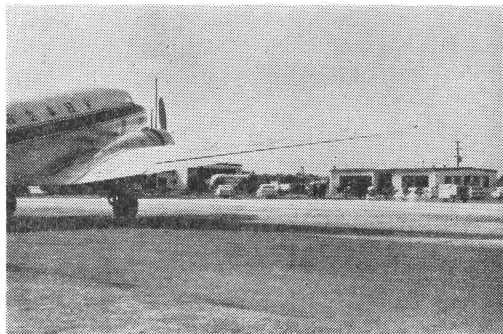
三沢は元来航空には縁の深い土地で、この淋代海岸は昭和6年世界最初の太平洋無着陸飛行に成功したアメリカのミスヴォドル号の発進地として、当時世界に名を知られたところである。

昭和16年に旧海軍の航空基地が設けられたが、戦後米軍の進駐とともにこれに拡張の手が加えられ、極東でも有数といわれる大空軍基地が建設された。それまでは貧寒とした農村に過ぎなかったのが、基地建設に伴って各地から集まった労務者、工事施工業者、関係官公署の公務員、商人その他など急激に住民が増加し、ここにこつ然と都市が生まれた。現在人口は約3万8千、それに1万内外といわれる米軍将兵とその家族が加わる。三沢市は米軍の基地建設によって生まれ、基地によりかかって生きている街なのである。



三沢基地正門前

三沢航空測候所



エアターミナル待合所付近

東北本線の三沢駅はもとの古間木（ふるまぎ）駅が近年改称されたもの、ここからバスで約15分、市街地を通りぬけて基地正門前に着く。正門でバスの点検を受け、一步基地内に足をふみ入れればそこにはアメリカナイズされた風景が展開される。縦横にめぐらされた舗装道路、手入の行きとどいた緑の芝ふの中に整然とならぶ住宅、さまざまの建物施設等、はじめてここを訪れる人の眼を見張らせる。この諸施設を見学を訪れる団体も多いようで、殊に毎年5月の第3土曜日に催される米三軍統合記念日の基地開放デーには近隣各地から押し寄せる見物客で大賑わいを呈する。

さて、昭和27年、戦後禁止されていた民間航空が再開、東京一札幌定期便が始まるとともに三沢もその寄航地となり、その気象援助業務を行なうために三沢航空測候所がおかれた。が、もともとここは軍用飛行場であり、幹線ルートにあたるとはいえず近くに大都市もなく、しょせんは田舎の停留所程度にすぎない。現在この上空を飛ぶ定期旅客便の総数36便にもものぼるのにそのうちわずか2便しか寄港していないのである。

なお今年の6月からここに隣接する八戸飛行場にも定期便が寄港し始めており、また2年後の昭和40年には青森市にも空港が開港されることになっているので、いずれは県内の航空気象業務について総合的検討が行なわれることになろう。

（真木宏一記）

☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆